

二〇一〇年一月二三日(能勢古民家芋煮会参加者一〇名)

をみならの声遠きより冬田かな	雅流
庭隅へ日差し集めて石踏黄なり	"
古民家のかまどを借りて芋煮会	"
大鍋の底舐むる熾芋煮会	"
仮庵に昼餉の湯気の立ちにけり	せいじ
刈り取れば積石畝る棚田かな	"
白壁の割れ目と見しは枯蟪蛄	"
紅葉散る踏むまじくして見とれけり	よしお
蔓引けばパラパラとむかご落つ	"
茅葺の家よりのぞむ里の秋	"
冬の蝶棚田一枚とびきれず	よう子
トンネルの多し能勢路の紅葉山	"
炉を囲みにしへ偲ぶ句会かな	裕子
柿紅葉里山の道照らしけり	"
小春日の障子にうつる深庇	よし子
百年の囲炉裏囲んで句座楽し	"
火吹竹肺全開に吹きにけり	有香
炉を囲み大家族めく句会かな	小袖

俯瞰して棚田の秋を惜しみけり うつき

石踏明り行基の寺の布教板 "

炉に語る青畝汀女や句座懐し "

連衆の顔火照らせて炉辺の句座 "

囲炉裏辺に祖母の倂火吹竹 "

吟行句会みのる選

二〇一〇年一月二三日(能勢古民家芋煮会参加者一〇名)